

# 韓国ドラマの歴史認識

森 雅 雄

## 1.

韓国ドラマの『宮廷女官チャングムの誓い』(以下『大長今』)は、完璧な主張と完璧な自信と完璧な才能を持ったヒロインが、それ故に猪突し、その都度制裁を受け、そのたびに復活する<sup>1</sup>ということを繰り返す単調な物語と思われたのだが、一旦これを遠望するや、ヒロインとその敵役が布置されている歴史的な文脈を窺うことが出来て興味深い<sup>2</sup>。

テレビドラマの描く歴史は、純粹にアカデミックな歴史学のそれ(そのようなものがあるとして)ではないのだとすれば、韓国のフォークな面での歴史認識を表象しているものであろう。本稿では、NHKで放送された3本の韓国歴史ドラマにみられる彼らの歴史観を見ていく。

## 2.

『大長今』は、成宗の13年(1482年)、廃妃尹氏に賜薬を下されるシーンから始まる。ドラマではこれに立ち会った武官が、尹氏の子である燕山君の2年(1496年)に至って、官を辞して陸沈する。これがヒロインの父である。同じ年、水刺間(国王や王妃の食事を調理する部署)の内人(女官の位)が、同僚のチェ内人の調理した大妃(先王の妃)の食事を怪しみ、逆に罪を着せられて処刑されそうになるが、友人に助けられて野に逃れる。これがヒロインの母である(第1話)。

チェ内人が一服盛ろうとした大妃は成宗の母で、尹氏の廃妃を主張し、ついに彼女を死に追い詰めた仁粹大妃である(第24話)。史書によれば燕山君はこの大妃に乱暴を働いて死に至らしめた。チェ一族は中人(両班と常民の中間の身分。専門職や技術職などの実務に従事し経済力を持つ者も多い)であるが、権力の流れに棹さして、文宗(1450年即位)以来、一族から5人の最高尚宮(尚宮は女官の最高位、正五品)を水刺間に輩出させていた。文宗には禁物の食事を提供して、後に世祖となる人に取り入ったということになっている。またチェ内人の兄パンスルは商団(商人団体)を営し、水刺間や要路との関係を利用して利を得ていた(第1話)。文宗は蒲柳の質で在位2年にして世を去り、後を襲った瑞宗は幼く、叔父に王位を篡奪された。これが世祖である。

燕山君10年(1504年)、戚臣の任士洪が政権を握ろうとして行った、尹氏最後についての密告に乗じて、王は尹氏の廃妃と賜死に関係した人々を粛清した。「甲子士禍」である。仁粹大妃が死んだのもこの時である。ヒロインの父も、この時(第25話)、完璧な主張と完璧な自信を持つ娘の猪突によってその素性が露顕し捕縛される。チェ・パンスルはこの時、任士洪に仕えている六注比塵(鐘路にあった6種の特権的御用商人)の大房(その役員)ということになっている(第2話)。

燕山君12年(1506年)、王は臣下によって追放され、異母弟が擁立されて中宗となる。「中宗反正」である。任士洪も殺される。ドラマではクーデタ派の中にオ・ギョモがいて(第3話)、以後、チェ・パンスルは手を組む相手を彼に乗り換えることになる。小人は同ずるけれども和することはないのである。オ・ギョモは薬草のキバ

ナオウギの輸入をチェ・パンスルに独占させることで利を得たり(第7話)、チェ・パンスルは宮中に納める塩の質を落として得た資金をオ・ギョモに融通したりする(第13話)。オ・ギョモは架空の人物であるが、「勲旧派」の重鎮とされている。「勲旧派」は、世祖の王位篡奪を助けた功臣たちで、成宗の代まで独占的な地位を保持していた勢力である。

中宗 10 年(1515 年)と思しき年、宮中に入っていたヒロインは、倭国の密偵に襲われて怪我をしたヒーローを助ける(第6話)。NHK の放送では、その倭人であることが分かる部分はカットしてこれを視るその末裔たちに配慮を示しているが<sup>3</sup>、朝鮮と倭はこのドラマを構成する重要な軸線である。ヒーローは文官でありながらも内禁衛(国王の護衛隊)の従事官(軍営などに所属した武官職、従六品)で、「三浦倭乱」の時に捕らえた「倭寇」の自白から、漢城と王宮の地図を作るために忍び込んだ密偵を捜査していたのである(第7話)。後に押収した地図は朝鮮全土の山の状況を描き記したものであった(第9話)。

「三浦」は、いわゆる前期倭寇に対する太祖来の懐柔策が功を奏して倭寇そのものは下火になったものの、通交者が急増したことへの対応策として入港地を限定した場所で、富山浦(釜山浦)、乃而浦(齊浦)、塩浦(蔚浦)の3港である。その結果そこに定住する倭人(恒居倭人)も出てきて、成宗 25 年(1494 年)には 525 戸、3105 人にもものぼって殷賑を極めていた。倭人の行動と経済的影響はその外側にも浸潤してゆく。儒教的農本主義は商品経済の活動には全く無力で、密貿易は「富商大賈」と呼ばれた漢城の商人も関わるようになった。倭人への回賜品の中心であった綿布は朝鮮では貨幣でもあり、政府に収納されて財源となったから、貿易の増大は国家財政を圧迫した。1470 年代からは全羅道に、朝鮮人が倭人が判然としない「水賊」が出没し始め、三浦倭人もその嫌疑をかけられていた。中宗 4 年(1509 年)から 5 年にかけて、新任の守令・辺将(守令は府・牧・郡・県の長官の総称、辺将は鎮の指揮官の総称)は勇んで仮借のない取り締まりを行い誤認して斬殺に及んだ。「三浦倭乱」は、これに憤激した恒居倭人が、中宗 5 年(1510 年)に起こした武装蜂起事件である。対馬島主の援軍も得たが、朝鮮政府の反撃により対馬に後退し、朝鮮と対馬の関係は一時途絶した(村井 1993: 章、田中 1961: 158-162)。ヒーローが従事官に抜擢されたのはこのとき手柄を立てたからということになっている(第 24 話)。

次いで、ヒーローは朝鮮人参横流しの捜査を行い、これがチェ・パンスルの組合に流れていることを突き止め、更に捜査の手はその背後にいるオ・ギョモに近づいてくる(第 16 話、第 19 話、第 21 話、第 24 話)。

その後、ドラマでは、中宗が家鴨を食べて倒れるという事件が起こる。数ヶ月前の「己卯土禍」が話題になっているから、これは中宗 14 年(1519 年)の出来事ということになる。「己卯土禍」は、「勲旧派」が趙光祖ら「士林派」を賜死、配流させた事件で、ドラマでもオ・ギョモは趙光祖が流刑に留まっていることを頻りに気にかけている。ヒーローは再びチェ・パンスルの身辺やオ・ギョモとの関係を嗅ぎまわり始め、これに対してチェ・パンスルやオ・ギョモは彼を趙光祖と結びつけて対抗しようとする(第 26 話)。その結果、趙光祖は死刑、ヒロインは奴婢として済州に追放されることになる。ヒーローは趙光祖に医者を世話したこともあった(第 27 話)。趙光祖に希望を託し、新たに勢力を結集しようともしているから(第 33 話)、ヒーローが「士林派」であることは間違いあるまい。「士林派」と「勲旧派」もこのドラマを構成する重要な軸線である。

「士林派」は元々在地の両班である。朝鮮初期には中央官僚と結んでいたが、後者が勲旧化し漢城に定住するようになるとその結びつきが弛み、郷村の支配権をめぐって、双方は対立するようになる。その中でも中小

地主層出身者は中央に進出を始め、「勲旧派」を批判するようになる。世祖も自ら作り出した「勲旧派」を牽制するために彼らを培養し、こうして成宗代に中央に形成されたのが「士林派」である。

朱子学における勲旧派は、行政文書の作成や書籍の編纂などに要する詩文や学問の実用性を重視した詞章派であるのに対して、士林派は、高麗に殉じて殺された鄭夢周(1337～1392)の節義や落郷した吉再(1353～1419)の性理学を精神的支柱にした経学派であった。鄭夢周の流した血痕と伝えられる斑点は今も開城の善竹橋に残っていて、北朝鮮の観光スポットの一つになっている。彼らはその学問を郷村で養い、また郷村を支配するのにそれを利用した。勲旧勢力を批判する時もその思弁と朱子学的道徳性の優位を根拠にした。勲旧派と士林派の違いは現実主義と理想主義、スノップとナイーブ、或いは堀米庸三の用語法を借りるならば、正統と異端(堀米 1964:33)の違いと言ってもいいだろう。こうして起きた勲旧派との血で血を洗う争いが「土禍」である。

燕山君4年(1498年)、楚の義帝を廃した項羽の故事を引くことで世祖の正統性を非難したとして、金宗直(1431～1492)の文章を咎めてその遺骸を剖棺斬屍にし、門下全体を肅清したのが「戊午土禍」である。金宗直は吉再の弟子で、その跡を継いで弟子を育成し成宗代に中央に官僚を送り込んだ人物である。

中宗の政治刷新で登用されたのが趙光祖(1482～1519)とその同志で、趙光祖は金宗直の弟子の金宏弼(1454～1504)に学んだ人である。しかし、趙光祖の原理原則に徹して硬直した道学政治は勲旧派の反発を買い、なにより中宗も厭悪するところとなって惹起したのが「己卯土禍」である。趙光祖は流刑ののち賜薬を下された。繰り返される土禍は彼らの思想をより思弁的に先鋭化させ、論争的にさせてゆく。中宗15年(1517年)には鄭夢周の墓碑が建てられる。二君に見えまいとした彼の忠節を称えて、高麗の官職だけが記され李氏から授けられた官職は刻まれていない。

済州に流されたヒロインと、内禁衛を辞し済州道水軍の武官となったヒーローはそこで如何にも日本の武將然とした「倭寇」と遭遇することになる。2年後とあるから中宗16年(1521年)のことになる(第31話)。三浦倭乱直後から従来の対馬-慶尚道の線とは異なる「加延助奇」(カイゾクの音写)が登場していて、中宗17年(1522年)には、「楸子島倭変」をはじめとして全羅南道から済州島にかけて「賊倭」が頻発していた。当初、朝鮮政府はこれを対馬島倭と見ていたが、これはいわゆる後期倭寇の先触れであつたらしい。中宗も34年(1539年)には「大抵南方の人、往々にして変じて倭服を着し」と語ったり、同じ頃から「荒唐船」という用語が出てくるようになる。「荒唐船」は倭船か唐船か不分明な海賊船を指す名称である。その国籍が上国が夷狄であるかは彼らにとって決定的に重要なことなのである(村井 1993:187-192)。程なく王直が五島に出現し、明宗10年(1555年)にはその船団が全羅道方面に行動することになる。しかし、ドラマでは、つまりフォークな面での歴史観では、当時の朝鮮政府は承知した詮索もしていた唐倭の弁別について忖度することもなく、単純に日本と短絡させてその先に思考が及ぶことはない。

『新しい歴史教科書』が物議を醸した折り、「倭寇」についての韓国政府の修正要求の理由も「日本人以外に朝鮮人も多く含む...大部分は中国人」という記述に対して、「倭寇=日本人」という既存の歴史認識を払拭(ふっしょく)させるため倭寇に朝鮮人と中国人を含めて記述<sup>4</sup>したというものだった。しかし、既存のものは何れ陳腐化するものである。市販本の『新しい歴史教科書』での原文は「日本人のほかに朝鮮人も多く含まれていた」(西尾ほか 2001:97)と「構成員のほとんどは中国人だった」(西尾ほか 2001:106)であるが、前者は前

期倭寇、後者は後期倭寇についての記述である。後者については、日本では既に常識で筆者も教科書で習ったものである。前者については比較的最近に田中健夫が述べて(田中 1986,1987)注目された説で、『新しい歴史教科書』もこれに負っているのだろう<sup>5</sup>。

ここで興味深いことは、「任那日本府説」に対する修正要求の理由は「韓国と日本の 50 余年間の研究の結果、認められない説」というものであることである。片や既存の歴史認識を墨守して新しい研究成果を採用せず、片や新しい研究成果を取り入れて古い歴史認識を棄て去る。その消息は科学哲学者ラカトシュの示すが如くであって(チャルマーズ 1983:140)、そこには反証されることのないハードコアがあり、歴史学の成果はそれを保護する限りにおいて採用される保護帯に過ぎないのである。

ドラマではヒロインとヒーローが中央へ帰還した後、ヒーローの上司で士林派と思しき左賛成(行政府の最高機関・議政府の次官、従一品)らが、この倭寇と女真への対抗策を献策する。女真はツングース系民族で渤海を建てた靺鞨の後身とも言われる。渤海の滅亡とともに高麗北辺を侵し、16 世紀も「倭寇」の活動に合わせるようにその行動が活発化していた。

しかし、その対抗策の人事は「己卯土禍」に関連した者の復権であり、財源は功臣田の 1 割削減であったから、オ・ギョモは当然これに反対である(第 35、36 話)。この献策は「備辺司」の設置と思われる。備辺司は三浦倭乱の後、有事の際に臨時に設けられた組織で、中宗 17 年にも設置されている。しかし、『経国大典』にない超法規機関であり、既存の行政機構と衝突しかねない存在ともなっており、この時には廃止論が高まっている。オ・ギョモの反対にはそういう事情も反映しているのであろう。

ヒーローはチェ・パンスルと倭人の捜査に復帰し、チェ・パンスル商団から持ち出された地図に記された印とかつて倭の密偵から奪った地図との類似に気づき(第 43 話)、またチェ・パンスルの家から倭国の胡椒を見つけたりもする(第 44 話)。地図の印は国が採掘を禁じている銀の鉱山であることが判明し、オ・ギョモとの繋がりが疑われ(第 46 話)、倭人の自供から、単なる倭寇ではない香川地域の官吏、或いは領主がオ・ギョモと密貿易の条約を結んでいることを知る(第 47 話)。これは京商と倭との密貿易(村井 1993:178)が下敷きになっているだろう。しかし銀山については疑問がある。1542 年以前については確かに倭は銀を輸入していたが、倭人が欲し輸入していた圧倒的な商品は木綿であった。しかも、銀は 1542 年以降倭の主力輸出品になるのである。それは朝鮮から「灰吹法」という新しい製錬技術が伝わって銀の算出量が急増したことによる(村井 1993:163)。「灰吹法」が伝えられたのは 1533 年。倭の密偵は朝鮮の銀山の地図を作るのではなく、精錬技術を盗むと設定した方がより説得的だったろうと思う。

そしてついに、オ・ギョモやチェ・パンスルたちは訴追され有罪に持ち込まれる。オ・ギョモの罪状は成均館の学田の「流用」「横流し」、チェ・パンスル商団に独占権を与える見返りの収賄、そしてなにより重要なのは倭国との密貿易であった(第 48 話)。こうして、朝鮮を護持する士林派と倭と密通する勲功派という形で二つの軸線が重なるのである。

太祖代から成宗代まで、15 世紀朝鮮の世界認識と対外政策は現実性と融通性を備えたものだった(河 2008:32,42,54)。しかし、中宗代以降「士林派」が進出し朱子学の体系化が進んでそれを政策に反映させていった 16 世紀は、対外認識や外交政策も明の中華と朝鮮の小中華という論理構造で理解され名分論に執着し硬直化するようになっていく(河 2008:35,42,55)。

中宗 39 年(1544 年)、中宗薨去。その前に、中宗はヒロインに対する廷臣の迫害を予期して彼女を漢城から落とす命を下していた。彼女が再び宮中に迎えられるのは「8年後」の明宗6年(1550 年)ということになっているが、若干数字が合わない。中宗を襲った仁宗は在位1年に満たずして薨去。弟の明宗が嗣いだ、幼かったので母の文定王后が「垂簾聴政」を行っている最中である。「垂簾聴政」は簾を垂らして女性は政治に関与しないという体にして、大妃や大王大妃が国事を裁決することである。文定王后は、臣下はおろか我が子の明宗までもがその死を待っていたという稀代の悪后で、明宗即位の年(1545 年)には「乙巳土禍」を起こして、仁宗の外叔にあたる尹任を殺している。明宗代は戚臣政治の時代で士林派のヘゲモニーは未だ確立されていなかった。ヒロインとヒーローがそのまま宮中に入らなかったのはそのためかも知れない。

士林派が実権を握るのはその次の宣祖代になってからである。しかし、士林派の権力はその理想主義とナイーブさゆえに安定することはない。権力の重みは常にその臨界点を越え、彼ら朱子学徒が奉ずる「太極図」の如くに分裂に分裂を重ねて朋党を生成し、これが互いに争うことになる。勲功派は同じて和することはない小人であったとしても、士林派は同じないけれども和することもない君子なのである。先ず、宣祖8年(1575 年)、官職を争って東人と西人に分裂する。士林派の政権掌握によって全盛期を迎えた経学も、李滉によって大成された主理説と李珥によってまとめられた主気説に分かれ、これが東人と西人に重なって党争に理論的エネルギーを供給する。宣祖24年(1591 年)、世子冊封問題で西人が失脚し、優勢となった東人は西人に対する肅清の硬軟によって北人と南人に分裂する。秀吉の軍隊が撤兵した(宣祖31年、1598年)後は、北人が政治の主導権を掌握するが、その時彼らが用いたのは、戦時に領議政(議政府の長、正一品)として戦争と政治を指導していた南人の柳成龍に対して、倭との和議を容認したという朱子学的道義に基づく斥和(和議の拒否)の論理であった。倭と親しむ者に対する批判はここに遡る。しかし、宣祖32年(1599年)、北人も判で押したように大北と小北に分かれ、更に光海君を擁立した大北は骨北と肉北と中北に分裂し、小北の柳永慶が登用されるや小北も清北と濁北に別れる。

しかし、1623 年、西人によるクーデタが起こり、仁祖を擁立し(「仁祖反正」)、実権が西人に移ると、西人は例の如くに功西と清西に二分する。光海君の外交方針は明とも女真の建てた後金とも等距離を保つという現実的なものであったが、それを明に背きオランケ(北の蛮人、女真)に従った不義理・不恩恵であるとするのを反正の名分に掲げた仁祖と西人の外交方針は親明排金の道德外交に反転する。その結果受けた清(後金を改めた)からの侵攻により、仁祖15年(1637年)、城下之盟を余儀なくされる。大清皇帝の戦勝を誇る所謂「三田渡碑」が建碑され、これは今も韓国に突き刺さっている。「こういう状況で無力な文化が選ぶことができる最も簡単な解決策は心理的補償だった」(李 2006 上:545)。倭乱と胡乱以後 17 世紀の小中華意識は更に強化される(河 2008:42,57)。華夷の区別は峻別化され、時間の流れの中で不断に生起している差異は埋めて均され、それを生起させるべき時間は停止して、いわば空間化するのである。このような意識は海禁を更に強化させ、倭寇が生きていた国家領域を越えた「マージナル」な領域を大きく退縮させ、国家領域はより明確に強固なものになってゆく(村井 1993:222-223)。言い換えれば、それこそが、つまり華夷秩序を支えた朱子学こそが朝鮮におけるナショナルの母胎となったのである。更に言えば、朱子学徒の残照は今日に及んで、両班から多くを輩出した朝鮮のコミュニスト<sup>6</sup>を経由して、左翼こそより民族主義的であるという韓国の逆説に繋がっているように見えるのである。

### 3.

西人は、仁祖の末年、功西が原党と洛党に、清西が山党と漢党に分かれて四分するが、顕宗代に再び糾合された。西人政権は顕宗の末年の15年(1674年)、孝宗妃の服喪期間をめぐって西人の臣僚が追われて、南人が進出するまで続いた。肅宗代は党争が頂点に達して、南人と西人の間で政権が3度ターンノーヴァーした。

明らかに『グリーン・デスティニー』を真似たワイヤーアクションシーンで評判を取った『チェオクの剣』(以下『茶母』)はこのような時代を背景にしたドラマで、設定は1692年、即ち肅宗18年の物語である<sup>7</sup>。ヒロインは捕盗庁(犯罪者を捕らえ罰する官庁)の茶母(お茶くみだが場合によっては捜査の補助もした)で、これに相対するのは謀叛集団の頭領である。

しかし、このドラマで悪玉に配当されているのは、頭領の背後にいる商人のチェ・ダルヒョンと「南人」の長で兵曹判書(兵曹は軍事を管掌する官庁。判書はその長官で、正二品)のチョン・ピルチュンである。1692年は確かに南人が政権を掌握していた時期に相当する。先ず朋党に属することが悪の徴であることは、善玉の捕盗大将(捕盗庁の長官)とその竹馬の友である訓練大将(精兵の養成、飢民の救済、首都防衛、国王の警護を任務とする訓練都監の長官)とが「どこの党にも染まっていない」「両雄」とされ(「免罪」)、訓練大将が「党争に明け暮れる奸臣どもが牛耳ってる」「父の面影」と述べていることでも明らかである。

また、朋党の中でも「南人」は倭と和議を結んだ朋党として、一段と否定的な標識になるだろう。ダルヒョンとピルチュンが加藤マサユキら倭人の武士を雇っていることも同様である<sup>8</sup>。密貿易を一切禁止して税を10倍に上げ毎年朝貢として金千両と錫十萬斤を納める代わりに、京江(漢城のトゥクソムから楊花島に至る漢江一帯)まで船を入れさせて欲しいという対馬藩主の親書に対して、刑曹判書(法律、刑罰、奴婢に関する官庁の長官)の反対にもかかわらず、ピルチュンがこれを受け入れるように奏上することも同じである(「追跡」)。謀叛の当日、都を襲撃する「精鋭軍」が「倭軍」であり<sup>9</sup>、その代償が済州を渡すということに至っては言うまでもない。頭領はこれに対して、「済州の民は、朝鮮の民ではないのか？」と反論している(「チェオクの最後」)。

ここで注意してよいことは、倭人そのものは脇役に過ぎず、従って悪玉というわけではないということである。悪玉はあくまでも夷狄と通じる「同胞」なのである。朝鮮を護持する善玉と夷狄と通ずる悪玉という結構は『大長今』と同じである。ただし、『大長今』の時代に夷狄として形象された倭寇にはまだ現実との繋がりがあったけれども、『茶母』の時代のそれは殆ど時代錯誤的で、アプリオリとなった観念世界の投影に過ぎないと言うべきだろう。

そのような形而上学を共有しない筆者には、彼らダルヒョンやピルチュンが単純に悪であるとは思えないのである。ピルチュンは対馬藩からの要請の受け入れを、倭寇<sup>10</sup>の被害を防ぐ現実的な方策と考えているようだ(「追跡」)。また「富国のためには実利を念頭に置くべき」と奏上して「実利」を重視している。辞表でも「大臣たちの上書のように、倭国の者たちと同じ空の下では生きられない」と記した上で、「今後、京江の倭館を通じて、国の財政が少しでも潤うのであれば、今の羞恥は富国強兵を成し遂げた後にでも返上できる」と繰り返している(「許されぬ愛」)。ここには現実主義があり、それはかつては勲功派が持ち合わせていたものであろう。

また、ダルヒョンやビルチュンは、目的のためには同志の者や無辜の朝鮮の民を殺させることも厭わないマキヤベリズムもある(東アジア世界ならば、管仲の名を挙げた方が親しいだろう)。但し念を押せば、ビルチュンにとっても倭は不倶戴天なのであり、漢城に倭館を置くことは「恥辱」なのである。その点では彼らも他の面々と変わるところはない。しかし、その上で彼らには現実と連絡する回路があるのである。

とはいえ、謀叛の「精鋭軍」が「倭軍」であることには驚かされる。ダルヒョンとビルチュンが嘗々と兵を養ってきたという設定は一体何だったのだろうか。あらかじめ失敗が約束されたような謀叛、或いはついに主体とはなり得ぬような謀叛。これこそが彼らの後の歴史を規定した、のかどうかは分からないけれども、少なくともここに後の歴史の投影があることは間違いないだろうと思う。

#### 4 .

『大長今』と『茶母』における悪玉は倭人それ自体ではなく、あくまでも倭と通じる同胞であった。即ち、これらは内部にある不純な要素を排除する、いってみれば民族浄化のドラマなのである。しかし、内部もまた即自的な存在ではなく、外部との関係における限りでの内部なのであるから、民族浄化の完了は見果てぬ夢でしかなく、ただどこまでも不純物をえり出すための微分化する作業が続くばかりなのである。

微分があれば積分がある。ヒーローがライバルや百済などと戦いながら王権を確立してゆく歴史ファンタジードラマの『太王四神記』を稼働させているのは、『大長今』や『茶母』とは逆に、外部の要素を取り込んで自己を肥大化させていく動きである。

ヒーローが確立する王権は高句麗のそれではあるが、ドラマでは古に存在したチュシンの王権であるとされ、ドラマは最初にチュシン王ファヌンの物語が描かれる。これは、時代を遙かに下って高麗時代の 13 世紀に作られた『三国遺事』や『帝王韻記』に記されている檀君神話が下敷きになっている。

『三国遺事』は先ず『魏書』の「<sup>すなわちやく</sup>乃<sup>さい</sup>往二千載、有壇君王俊、立都阿斯。開国号朝鮮。與高同時」(高は高麗の定宗の諱堯を避けて類似音高で代用したもの)を引くが、現行の『魏書』にはなく、他の正史にもない記事である。『史記』では世家にある箕子の記述が最初のもので、朝鮮伝には衛満の朝鮮を記す。『三国遺事』は次いで、『古記』に云うとして、下界におりた<sup>ファヌン</sup>桓雄が熊女と婚して生まれた檀君が、堯の 50 年から周の武王が箕子を封ずるまで、平壤城ついで白岳山阿斯達に都し朝鮮と称したとする。

『帝王韻記』には「尸羅、高禮、南・北沃沮、東・北扶餘、濊、與貊皆檀君之壽也」とある。尸羅は新羅、高禮は高句麗。これらの国々はみな檀君の子孫だというのである(朴(訳) 1974:162)。『後漢書』や『三国志』によれば沃沮は高句麗の東方、咸鏡道方面、扶餘は高句麗の北方、発祥地は吉林市の辺り、濊は沃沮の南、江原道一帯にある。貊は高句麗の部族名なので(三品 1953:14)ダブルカウントしていることになる。檀君朝鮮はこれら東北アジアの諸族を統合した広域にわたる古代王国であったというわけである。

堯舜から夏朝 17 代殷朝 30 代を経て周の武王に至る期間を檀君 1 代でまかなう不合理は合理化の余地があるとしても、檀君の治世はその末年とされる武王の紀元前 11 世紀でさえ、朝鮮ではいまだ「基本的には採集経済の枠内にとどまっていて、原始共同体の社会が継続していた」(武田(編) 1985:13) 櫛目土器文化の時代である。ましてその時代に半島からマンチャーリアまでを統べる版図の広さを想像することは難しい。今

西龍が1929年に述べた「檀君の称号と現存の伝説とは王氏高麗の中期以後に作成せられたるものにして」、「もともと平壤地方に於ける一地祇にすぎずして、広く行はれしものにあらずれども、其縁起の構成が民族の自尊を感じたる時の思想に偶々適中せる為め、書籍にも記載さるゝに至り、其説やゝ行はれたる」（今西1970:124-125）という総括は、少なくとも日本の学界では今でも通用する相場のはずである。

しかし韓国ではそうではない。檀君の存在は高麗以後も強化され李朝時代になると国家祭祀の対象となった。ことに王位を篡奪するほどにエネルギーが充ちた世祖は強国の高句麗に惹かれ、寵臣の権勢は漢の四郡の位置を満州に、箕子朝鮮の領土を遼東遼西に比定してこれらを朝鮮から遠方に追いやった。官撰史書では熊女との婚姻などは省いて合理化が図られ、私撰史書では古書の檀君伝承をそのまま記述したり（許穆、1595～1682）、箕子以前に檀君が礼楽を教えたと主張したり（洪万宗、1643～1725）、箕子の家系の存続を述べて箕子の朝鮮化を図ったりした（李鐘徽、1731～1797）。李鐘徽は、「白頭山定界碑」の設置により朝鮮の国土であるべき渤海の地が失われたとしてその回復を主張し、白頭山を水源とする伏流水の如くに朝鮮ナショナリズムの底を流れる「北進論」の嚆矢となって近代に引き継がれていく（野崎 1998:2章）<sup>11</sup>。

今西の檀君否定の論も猛烈な反発を招く。朝鮮総督府が編纂に関わった『朝鮮史』の朝鮮側委員も檀君の記載を要求して日本側委員と激しく争った。新しく創造されていた「民族」の語は<sup>12</sup>20世紀初頭の朝鮮でも流行して檀君と結びつけられ、自らを檀君の共通の後裔と見なすようになり、檀君の使用が増加した。申采浩は民族と檀君の結びつきを歴史学に持ち込んで、1908年には「読史新論」を書いていた（シュミット2007:146-154）。獄中に死んで未完に終わった『朝鮮上古史』でも、檀君建国は史実であり、先に引いた『魏書』の記事に拠って「高句麗建国以前二千年が檀君王儉の元年である」（申 1983:77）とする。彼は、高句麗の始祖は紀元前200年頃に出生したはずとする（申 1983:120）ので、檀君建国は紀元前22世紀のことになる。またその版図については、「紀元前十世紀ごろから五、六百年は、大檀君朝鮮の全盛時代である」とし、「紀元前五・六世紀頃に弗離支〔ブルジ〕という者が朝鮮の兵を率いて今の直隸・山西・山東などの省を征服し」（申 1983:74）たと述べている。

歴史解釈の過剰は偽書の作成に行き着く。『揆園史話』は1928年以前のそれほど遠くない時期に、『檀奇古史』に至っては大战後の1945年から1949年の間に、『桓檀古記』も1945年以後に作られたものらしい（趙1993:398-400）。

「読史新論」が掲載された翌年には檀君を崇拜する檀君教（翌年大倥教）も創始された。朝鮮族の境域についても、その民族系統図は朝鮮族を初めとして扶餘族、濊貊族、沃沮族、肅慎族から女真族、満州族、鮮卑族、契丹族、靺鞨族などに至る全てが檀君の末裔たる「倍達族」から分岐したもので、これらは皆同族であるとされる（野崎 1998:53）。「倍達」は、今西によれば、「檀」の朝鮮語方言である（今西 1970:122）。『帝王韻記』に比べて鮮卑、契丹、女真、満州の線と靺鞨が増えている。

『朝鮮上古史』では、「古代のアジア東部の種族は、ウラル語族と支那語族の二語族に分かれており、〔…〕朝鮮族・匈奴族などは前者に属するものであった。朝鮮族が分化して朝鮮・鮮卑・女真・蒙古・ツングース等の族となり、匈奴族が移動分散して突厥（今の新疆族）・ハンガリー・トルコ・フィンランドなどの族になった」（申 1983:57）とある。朝鮮族グループに限れば蒙古も加わっている。これは蒙古に支配されて「民族の自尊を感じたる時の」『帝王韻記』の段階では認められないことだろう。「ウラル語族」までレベルを上げれば、突

厥、ハンガリー、トルコ、フィンランドも同族になる。東北アジアにおける「支那語族」以外の民族を総まとめにしたものとも言える。

ここで「ウラル語族」と言っているのは所謂「ウラル・アルタイ語族」のことである。ウラル・アルタイ説は当時流行の学説で、日本には藤岡勝二によって持ち込まれた。彼が東京帝国大学言語学講座の教授となったこともあって、日本でも大いに流布したもので、ここにその影響は明らかである<sup>13</sup>。

またこれは、当時流行った言い方をすれば「ツラン」とも等価である。ツラニズムは極東の日本からヨーロッパのハンガリー、フィンランドまでを繋げる雄大な民族圏構想で、これを最初に考えたのは19世紀半ば、フィンランドのM.A.カストレーンである。これが民族運動と連絡し、19世紀の後半、ロシア統治下のトルコ系住民の間でツラニズムとなった。青年トルコの革命後、オスマン帝国に持ち込まれ、次いでハンガリーに入ってオーストリア＝ハンガリー帝国からの独立運動となる。日本へもツラン民族としての連帯を求め、満蒙疆に食指が動いていた日本もこれに応じていく(海野 2005:第2章)。申采浩の『朝鮮上古史』は、ツランの範疇だけではなく、独立を志向するエトスにおいてもツラニズムの圏域にあるのである。同時に、「一進会会員による『朝鮮民族の故地』たる満洲への開拓移民」(内田良平研究会編 2003:122)を計画した内田良平や「その昔、満洲、蒙古、シベリアなどに生活してきた鞑靼人や渤海、高句麗などの諸国は、現在の朝鮮民族の祖先である。[...]その昔の版図に『大高麗国』を新国家として作らせよう」(内田良平研究会編 2003:244)と構想した、頭山満系の朝鮮浪人末永節のアジア主義とも照応する。スクリーメージラインの両側に対峙してヘルメットの色は違っている、その下に隠された相貌はうり二つに似ているのである。

この歴史観はその後も脈々と受け継がれ、大倅教が決めた檀君開国の日は今日でも国の祭日である。一部の新聞でも紀元前2333年を元年とする檀君紀年(檀紀)が併記されている。このドラマのプロデューサーも「檀君の国は万里の長城もバイカル湖も越えるかなり広い領土を持っていた。それを回復する意味で歴史上唯一、領土を拡張した広開土大王(クワンゲトデワン)をチュシンの生まれ変わったものと設定した」と述べている<sup>14</sup>。ドラマでは「周辺国は将来のチュシン」(第5話)、「昔は高句麗、百濟、靺鞨、鮮卑も兄弟だった」(第12話)、「倍達族の住む全部がチュシン」(第20話)、「高句麗と契丹は兄と弟」「西域の端まで国を作る」(第21話)、「百濟とは兄弟国で、遠くは同じチュシンの民」(第23話)などという台詞が出てくる。チュシンは「朝鮮」の昔の読みということらしい<sup>15</sup>。チュシンは、1994年に出版された金珊瑚の超古代史漫画『大朝鮮帝国歴史』にも朝鮮民族が住む全世界として出てくる。女真や肅慎にもその音を留め中心を意味するという説やこのドラマの台湾版公式サイトでは「肅慎」と表記するという話も仄聞するが、確認はしていない。

教科書を見る限りでは、檀君に対する信憑は年を追うごとに強まるばかりに見える。「維新体制」翌年の1973年に発表された第3次教育課程で「社会科」から分離してできた「国史」の中学校用教科書では、「わが国に青銅器文化が伝来したのは紀元前七、八世紀ごろからであった。[...]青銅器文化を受け入れて一番最初に部族国家を建てたのは、大同江流域に住んでいた部族である。これが古朝鮮である。古朝鮮の建国神話である『檀君神話』をみれば、建国当時の社会の様子を推測することができる」(渡部(編訳)1977:46-47)と記されていたのだが、盧泰愚政権末期の1992年の第6次教育課程で告示され<sup>16</sup>、金泳三政権下の1993年から施行された教科書では、「韓半島では紀元前10世紀頃、満州ではそれより前に青銅器時代がはじまった。[...]韓半島と満州遼寧地方の青銅器文化は同じ系統の文化であり、中国の青銅器文

化とは、性格が異なるものである。〔……〕満州遼寧地方と韓半島西北地方に、君長が治めるたくさんの部族が現れた。檀君はこうした部族を統合して古朝鮮を建国した。(石渡(監訳) 2001:30-32)となった。その範囲は地図でも示されており、北は白頭山を越えて第二松花江は農安まで、南は仁川 - 元山の線まで、東はウラジオストックの手前まで、西は遼河を越えて山海関までが古朝鮮の勢力範囲で、北はハルビン、南は済州島、東は同じだが、西は江蘇省の北部までが東夷族の分布地域とされている(石渡(監訳) 2001:33)。この東夷族に日本が含まれていないのは、ここでの東夷族は檀君の末裔と考えているからであろう<sup>17</sup>。

軍事独裁政権下の教科書では、紀元前 7,8 世紀以後の青銅器時代に大同江流域に最初の部族国家が興り、その様子は檀君「神話」に反映されているという、蓋然性の内に留まるような記述であったものが、民主化された文民政権下の教科書では青銅器文化の始まりが紀元前 10 世紀以前に延伸し「伝来」したのから独自なものとなったのはともかくとして<sup>18</sup>、大同江流域に初めて現れた部族国家であったものが遼寧地方から韓半島西北部にかけての部族を統合した国家に増幅され、当時の社会の様子を推測することができる「神話」から檀君による古朝鮮建国の「事実」(石渡(監訳) 2001:32)へと存在の身分を変えて、史料はその実用性能を超えて使用されるが如くになった。

2007 年から使用される教科書では青銅器時代の始まりが紀元前 20 ないし 15 世紀へと更に延伸され、古朝鮮についても「檀君王儉が建国した国とされている」が「建国した」と断定的な記述になることが報じられた。学界の反応は、青銅器時代の紀元前 20 世紀については学問的根拠に乏しいとしているらしいが、古朝鮮については「三国遺事などによれば」という但し書きがついているので、特に異論は出されていないという<sup>19</sup>。日本書紀によれば、という但し書きをつけた任那日本府の記述と論理的に等価である。

ドラマの中盤以降は『三国史記』や広開土王碑の碑文を元にしていて、百済との戦いはその一つの山であるが(12~16 話)、これは『三国史記』高句麗本紀の広開土王元年(392 年)「秋七月、南伐百済拔十城」と「冬十月、攻陷百済關弥城、其城四面峭絶、海水環繞。王分軍七道、攻撃二十日乃拔」を下敷きにしたものである。ここで興味深いことは、ヒーロー直率の部隊が向かう百済の地は海を渡った先にある「西百済」とされていることである。ドラマに登場する地図でも山東半島あるいは見方によっては江蘇省と思いきやりに「西百済」があり、ヒーローたちは軍船を押し立てて渡海、敵前上陸する。『三国史記』の記述から關弥城が島にあることは確かだ、これを攻略するに軍船は必要であろうが、これは半島沿岸の島と考えてよいはずである<sup>20</sup>。

しかし、「西百済」はドラマ作者の妄想ではない。先に触れた『朝鮮上古史』にもそれが出ており、「近仇首王は〔……〕海を渡って支那大陸を経略して、鮮卑の慕容氏の燕と符氏の秦〔前秦〕を征圧〔三八三年〕し、今の遼西・山東・江蘇・浙江等の地方を経略して広大な領土を確保した」(申 1983:223)とある。拠っているのは『梁書』と『宋書』の「百済 略有遼西晋平郡」<sup>21</sup>と『資治通鑑』の「夫余 初拠鹿山 為百済所残破 西徙近燕」の記述である。晋平是北京、鹿山はハルビンとするのはともかくとして、百済は鹿山にいた夫余を破っただけで、西の燕の近くに徙ったのは夫余なので、これでなぜ百済が燕と秦を征圧しあまつさえ江蘇・浙江まで経略したことを「証明している」ことになるのか分からない。東城王(在位 479~501 年)時代の海外領土は更に広がったとされ、ゆえに『旧唐書』百済伝に「西渡海 至越州 北渡海 至高麗 南渡海 至倭」とあるのであり、これで会稽(越州)付近、高句麗(高麗)の国境である遼水以西はみな百済のもので、日本全国は百済の属国となっていたことは疑いないとも言う(申 1983:248-249)。申采浩も「百済の地理」の説明としているこの行文が

らどうしてそのような結論が出てくるのかも不明である。

この説は安在鴻、崔棟、鄭寅普らに引き継がれ、1960年代にも再び脚光を浴びた。しかし、『宋書』や『梁書』は南朝の史書で、当事者である肝心の北朝の史書や『三国史記』には見えない。従って日本の学界はこの説を無視する<sup>22</sup>。韓国の学界でも主流は受け入れていないが、1970年代以降、「在野史学者」に継承され、江上波夫の騎馬民族説や金錫亨の列島内分国説<sup>23</sup>を養分に加えて増殖していくのである。

水野俊平〔2007:62-72〕によれば、1996年、KBS放送で「続武寧王陵、忘れた地 - 百濟 22 檐魯の秘密」と題されたドキュメンタリー番組が放映された。「檐魯」は『梁書』に見え、武寧王(在位 501～523)の頃、王族の子弟が派遣された 22 の拠点を指すものであるが、番組では、これが日本の九州地域や畿内に置かれており、百濟は更に大陸東部海岸にも進出し、ベトナム接境の「晋平郡」に檐魯が設置され、東南アジアにも領土を拡大していたというのである。しかし、百濟の遼西領有を記した『梁書』がこれを録さないのは面妖である。申采浩が北京としていた晋平郡が遥か南境の地に比定されたのは、「晋平郡」を「広西壮族自治区」にあつたとする黄有福の説(蘇 2001:150)を取り込んだのであろうか。同じ年に出版された崔ジンの『再び書く韓・日古代史』では、百濟は紀元前 18 年に遼東半島西部に「外百濟」を作り、西暦 100 年頃に九州に「大和百濟」を建て、2世紀に揚子江河口に「成陽郡」「広陵郡」を確保し、4世紀初めに西方に進出して「晋平」「遼西」2郡を設置し、更に近仇首王の時、山東半島を百濟領にしたと主張している。先に触れた『大朝鮮帝国歴史』でも大陸沿岸部が「外百濟」、日本の西半分が「奈良百濟」となっている。ドラマの「西百濟」はこの「外百濟」に相当するのである。

純朴な日本人は刮目するばかりであるが、百濟が大陸や日本に進出していたという説は、歴史学の主流では懐疑的であるにもかかわらず、教科書にも採用されている。第3次教育課程教科書では「近肖古王代の百濟は、韓半島の西部を領有する大国であった」(渡部(編訳) 1977:58)としか記されていないが、第6次教育課程教科書では「4世紀の近肖古王のときに、百濟は飛躍的な発展をとげた。〔……〕百濟は中国の遼西・山東地方、ならびに日本の九州地方にまで進出し」(石渡(監訳) 2001:54)となっている。高校の教科書では地図も付されている(石渡(監訳) 2000:70)。なお、こういう場合、外部からの動きは侵略・侵入・浸透と表記し、内部からの行動は広開土王の征伐、高麗・元連合軍の日本遠征、ベトナムへの派兵などと書いて侵略とは書かぬのが嗜みで、16世紀に硬直してアプリオリとなった世界観のなせる業であろう。『茶母』のヒーローが、その父祖が併合した耽羅国の民を朝鮮の民と何の疑いもなく信じるのもその故である。

## 5 .

内部に混在する異質な要素の排除の完了が見果てぬ夢ならば、自己の外部への拡張は独我の見る夢である。何れにせよ、「民族」という「歴史的に定義される実体」(シュミット 2007:148)を求める夢であることに変わりはない。夢ならばこれが混在することもある。第3次教育課程教科書は、『揆園史話』『檀奇古史』『桓檀古記』に依拠して檀君とその大帝国を史実とする「在野史学者」の批判を浴び、1978年に「国定教科書誤謬是正及び正史確認訴訟」が起こされ、1981年には国会で公聴会が開催され、これを神話とするアカデミズムの学者は吊し上げを食った。学界の元老は日本の「文化間諜」として告訴され、1987年の、民主化宣言をした盧

泰愚政権下の第5次教育課程では彼らの主張が一部盛り込まれることになった〔趙 1993:396, 李 1993:406-408〕<sup>24</sup>。ここには民族の膨張と浄化という二つのヴェクトルが併存して実体化の強化に働いていることが分かる。しかし、学界の元老を日本の「文化間諜」と痛罵する「在野史学者」が抛る『揆園史話』『檀奇古史』『檀檀古記』に対する批判もまた、それは親日派によって作られたというものであった〔趙 1993:399-400〕。

小中華外部の表象は長らく、北虜南倭に似て、北には女真、南に倭であり、180度地軸を変換してもその意義が変わることはなかった。しかし、女真族の建てた北の帝国が倒れ、南に新たに興った帝国への併合が視野に入らる中で、その対称性は破れ、微分する自己と積分する自己は南と北に向かって分裂したのである。高句麗の故地や渤海の領土が北に振れていることを足がかりに、積分する自己は女真を呑み込み蒙古を同化しつつにはボスポラス海峡に陸地が尽きる所まで肥大し、その一方で微分する自己はアジア南方の悪友を謝絶したのである<sup>25</sup>。

折しも韓国人が広開土王碑を発見し、広開土王は「満洲のもっとも広い範囲にその領土を拡大した」「英雄」として歓迎された。しかし、彼が、つまり韓国人の留学生がそれを「発見」したのは、鴨緑江北岸の約束の地においてではなく、東京の博物館においてであったのである〔シュミット 2007:1-2〕<sup>26</sup>。

## 【注】

1. このドラマのテキストは、張訳 2005 による。
2. 朝鮮史は、李 2006 上下、朴 1997 を参照した。
3. シナリオでは「貴様が倭の密偵だということは承知している」というヒーローの台詞が、吹替では「貴様ら密偵であろう」となっている。
4. 『産経新聞』平成 13 年 5 月 9 日付 14 版、12 頁。
5. 田中の描く和寇の姿は、村井章介が指摘する如く〔村井 1993:34-58〕、「国境をまたぐ地域」に混在し、或いは二つの民族が混血し、或いは二つの国家に両属するという、中世世界における「マージナル・マン」であることにその意義があると解すべきなのであって、その国籍に拘ってこれを規定する点において、韓国政府も「新しい歴史教科書」と変わることはなく、何れも近代のナショナルな枠組みで中世世界を切り取っているだけなのである。
6. 1920 年代、社会主義思想が入ってきた時、その担い手は両班の子弟であった。一方、民村(常民の村)は文明開化の波に乗り、キリスト教に帰依し、日本時代はその統治に協力し、欧米や日本に留学する者も多い傾きがあった。解放後、班村(両班の村)はことごとくアカとなり民村は大部分シロとなった〔尹 1983:193,199〕。
7. このドラマのテキストは、根本(訳) 2005 による。
8. 加藤は対馬出身の侍で、朝鮮における利権拡大を目論んで謀叛グループに左袒しているらしいが〔根本(訳) 2005:5〕、三浦倭乱の頃ならともかく、17 世紀末までは現実的ではあるまい。倭館の人口は 400~500 人位だったらしいが、塙の外は決められた区域しか出られず、暮れ六つまでには戻ってこなければならなかったのである〔田代 2002:58-59〕。
9. ドラマでは、対馬藩主の望みが叶えられたらしく、漢城に倭館が存在していて、倭軍の基地になっているが、史実では漢

- 城の倭館が再開されることはなかった。
10. この時点で倭寇は既に過去のものである。また、ピルヂュンは、「豆毛浦の倭館をなくすなりしなければならぬ」と述べているが、1607年に講和成立とともに豆毛浦(現在の水晶洞のあたり)に設立された倭館は、1678年に草梁倭館(龍頭山公園の一带)に移っていた。
11. 清朝は、朝鮮を下して以来、鴨緑江・図們江(豆満江)の北側を封禁の地としていたが、朝鮮人が入植して来るので、康熙51年(1712年)、国境を確定するために、長白山(白頭山)最高峰を南東に4kmほど下った川の伏流する辺りに「定界碑」を建て、「大清烏喇総管・穆克登奉旨查辺至此、審視、西為鴨緑、東為土門、故於分水嶺上勒石為記」云々と刻んだ。その後も朝鮮人農民は年々増加して19世紀半ばには住民の8割を占めるに至り、また碑面の「土門」江は白頭山東麓に湧水し東北に流れて海蘭河に入る川で、その南を東行する「豆満江」ではなく、従って土門・豆満両川間の土地(間島)も朝鮮領であると主張した。朝鮮政府はこれを受けて、1885年から清国との再交渉に及ぶも受け入れられず、最後は豆満江上流のどの支流を国境とするかという交渉になったが、1905年の「第2次日韓協約」(「乙巳保護条約」)で韓国は外交権を失い、1909年、日本と清国との間の「間島協約」で定界碑を起点とする国境が定められた。戦後の1962年、改めて中朝の間で「中朝辺界条約」が結ばれ、白頭山を二分する形で国境線が決められた。なお「定界碑」は、満州事変直前の1931年7月28日から29日にかけての日本軍の演習中に失われて今はない。また、「土門」江は、1907年の統監府臨時間島派出所の調査によって、海蘭河ではなく第二松花江に流入することが確かめられ、今日では「五道白河」と呼ばれている。松花江は黒竜江に合流してアムール川となるから、「定界碑」の述べる「土門」江を国境とするという記述を字義通りにとって、清国がロシアに譲り渡した沿海州、つまり渤海の故地まで朝鮮領とする主張を生むことになる。
12. 「民族」という語句は日本で最初に現れた。加藤弘之によるカスパー・ブルンチュリの『国家論』を翻訳した『国法汎論』の中で用いられている(シュミット 2007:147,266n3)。
13. ウラル・アルタイ諸語は、ウラル語族とアルタイ諸語の総称である。ウラル語族はフィン＝ウゴル語派(フィンランド語、エストニア語、ハンガリー語など)とサモイェード語派からなり、アルタイ諸語はチュルク語(トルコ語、アゼルバイジャン語、トルクメン語、ウズベク語、キルギス語、カザフ語、タタール語、ウイグル語など)、モンゴル語、ツングース語(満州語も含まれる)の3つのグループの総称である。アルタイ諸語の同系やウラル・アルタイ諸語の同系は証明されていない。また、日本語や朝鮮語をアルタイ諸語に含める説もあるがこれも未証明である。
14. 『中央日報』(日本語電子版、2007年9月7日)「ペール脱いだペ・ヨンジュン主演ドラマ『太王四神記』」。
15. 同上。
16. この年は、金泳三が大統領選に勝利し、「新世代」が台頭し、それを背景にした韓国初のトレンディードラマ『嫉妬』が放映され、韓国ミュージックシーンに新時代を画したソテチ・ワ・アイドルがデビューした年でもある。その3枚目のアルバムに収められた「渤海を夢見て(海東盛国)」は南北統一を渤海に仮託したもので、そのビデオクリップは、DMZの南に残された朝鮮人民軍司令部跡の廃墟の上に立って太極旗を打ち振るソテチ・ワ・アイドルの姿であった。
17. 今西も「日本を除きたる極東古今の民族は盡く檀君の裔にして」(今西 1070:122)と述べている。
18. 半島と満州の文化が同じ系統の文化で中国の文化と異なるという点はナショナルな視点から見逃せない。中国の青銅器文化と異なるということの具体的な内容は、朝鮮の典型的な青銅器文化は琵琶形銅剣を中心とするものであるが、これは櫛目文土器から発達した朝鮮独自のコマ形土器文化に美松里型土器文化が合流し、紀元前8世紀頃から琵琶形銅剣などの青銅器文化を取り入れたもので、その後の展開で磨製石剣、石鏃のほか丹塗磨研土器を伴うことも多いのが

- 朝鮮半島特有ということである(武田(編) 2000:22-23)。
19. 『朝鮮日報』(日本語電子版、2007年2月25日入力)『韓国史教科書:1000年早められる『韓国の青銅器時代』』、『韓国史教科書:学界から異論『学問的根拠乏しい』(上)(下)』。
20. 城の比定地としては、黄海道延白郡海面姑美里説、その対岸の京畿道江華郡喬洞面華蓋山説がある(井上(訳注) 1983:145,n55)。申采浩もこの城については江華島であるとしている(申 1983:227)。
21. 『宋書』にある元の文は「百濟略有遼西、百濟所治謂之晋平郡晋平県」、『梁書』のそれは「百濟亦拋有遼西晋平二郡地矣。自置百濟郡」である。
22. ただし、井上秀雄は例外で、ここに史実の反映を認めている(井上 1972:85-86)。
23. 金錫亨は北朝鮮の歴史学者で、1963年に発表した論文で、紀元前から馬韓、辰韓の種族が日本に移住して分国を建てて馬韓、辰韓と称し、紀元後は百濟、新羅、高句麗から移住して分国を建てたとし、例えば、倭王濟への加封地である「新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓」は、列島内の地であるとした(金 1974)。
24. その要諦は次の通りである。古朝鮮がその初期には遼寧地域を中心に発達した。檀君神話を歴史的事実の反映とし、古朝鮮が青銅器文化の土台の上で展開した朝鮮最初の国家であり、その政治・文化的水準は発達した段階のものである。朝鮮の青銅器文化は満州、遼寧地域と同一文化圏につながる。これは学界の見解と真っ向から対立するもので、例えば、考古学界は韓国の青銅器文化のルーツをシベリア地方、バイカル湖の南の地域に求めているらしい(李 1993:408-409)。
25. 『太王四神記』の最後の戦いも後燕との戦い、即ち北進する戦いで締めくくられる。これは『三国史記』広開土王9年(400年)「二月、燕王盛以我王礼慢、自将兵三万襲之。以驃騎大將軍慕容熙為前鋒、拔新城・南蘇二城。拓地七百余里。徙<sup>うつして</sup>五千余戸而還」に相当するが、後燕や後燕の背後にいる北魏も鮮卑族なので、これらもチュシンの末裔ということになる。
26. この碑のレプリカは、独立記念館を初めとして韓国の各地に復元されているが、忠清北道陰城郡笠極面のクンパウィ顔彫刻公園や京畿道高陽市カフェ村にあるものは「而倭以辛卯年来渡海破百殘 新羅以為臣民」がそのまま刻まれているとして問題になった。独立記念館のものは「倭」「渡」「海」の部分が判読できないように処理されている(『朝鮮日報』日本語版電子版、2004年11月1日入力、「全国に復元中の『広開土王碑』日本式解釈そのままに」)。

## 【参考文献】

- 李基東 1993 「古朝鮮疆域論争」『別冊歴史読本』特別増刊14(「古史古伝」論争)、新人物往来社。
- 李成茂 2006 『朝鮮王朝史』上下、日本評論社。
- 石渡延男(監訳) 2000 『新版 韓国の歴史 - 国定韓国高等学校歴史教科書』(世界の教科書シリーズ1)明石書房。
- 石渡延男(監訳) 2001 『入門韓国の歴史【新装版】 - 国定韓国中学校国史教科書』(世界の教科書シリーズ4)明石書房。
- 井上秀雄 1972 『古代朝鮮』日本放送出版会。
- 井上秀雄(訳注) 1983 『三国史記』2、平凡社。
- 今西龍 1970 「檀君考」『朝鮮古史の研究』国書刊行会。
- 内田良平研究会(編) 2003 『国士 内田良平 - その思想と行動』展転社。

- 海野弘 2005 『陰謀と幻想の大アジア』平凡社。
- 鹿島昇(訳) 1986 『桓檀古記』(改訂5版)新國民社。
- 金錫亨 1974 「三韓三国の日本列島内分国について」井上秀雄・旗田巍『古代日本と朝鮮の歴史』学生社。
- シュミット,アンドレ 2007 『帝国のはざままで - 朝鮮近代とナショナリズム』名古屋大学出版会。
- 申采浩 1983 『朝鮮上古史』緑蔭書房。
- 蘇鎮轍 2001 『金石文に見る百濟武寧王の世界』彩流社。
- 武田幸男(編) 1985 『朝鮮史』(世界各国史17)山川出版社。
- 武田幸男(編) 2000 『朝鮮史』(新版世界各国史2)山川出版社。
- 田代和生 2002 『倭館 - 鎖国時代の日本人町』文藝春秋。
- 田中健夫 1961 『倭寇と勘合貿易』至文堂。
- 田中健夫 1986 「倭寇の登場 - 朝鮮と日本」『週刊朝日百科日本の歴史』15、中世 - 海環シナ海と環日本海、5-100~104頁。
- 田中健夫 1987 「倭寇と東アジア交通圏」『列島内外の交通と国家』(日本の社会史第1巻)岩波書店、137~181頁。
- チャルマーズ, A. F. 1983 『科学論の展間 - 科学とは何か?』恒星社厚生閣。
- 張銀英 2005 『宮廷女官チャングムの誓い シナリオ・ブック』全3巻、キネマ旬報社。
- 趙仁成 1993 「韓国における古代史論争と『揆園史話』『檀奇古史』『桓檀古記』」『別冊歴史読本』特別増刊14(「古史古伝」論争)、新人物往来社。
- 西尾幹二ほか 2001 『[市販本]新しい歴史教科書』扶桑社。
- 根本理恵(訳)2005 『チェオクの剣 シナリオ・ブック』キネマ旬報社。
- 野崎充彦 1998 『朝鮮の物語』大修館書店。
- 河宇鳳 2008 『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』明石書店。
- 朴斗抱(訳) 1974 『東明王篇・帝王韻紀』乙酉文化社。
- 朴永圭 1997 『朝鮮王朝実録』新潮社。
- 堀米庸三 1964 『正統と異端 - ヨーロッパ精神の底流』中央公論社。
- 三品彰英 1953 「滅貊族小考 - 民族関係文献批判に因んで」『朝鮮学報』4。
- 水野俊平 2007 『韓 vs 日「偽史ワールド」』小学館。
- 村井章介 1993 『中世倭人伝』岩波書店。
- 尹学準 1983 『オンドル夜話 現代両班考』中央公論社。
- 渡部学(編訳) 1977 『韓国の中学校『国史』教科書』図書文献センター。

# Historical Perceptions in Korean Television Drama

Masao Mori

## Abstract

The purpose of this paper is to show Korean historical perceptions by analyzing three Television dramas.

*Dae Jang Geum* and *Damo* are stories set in the Joseon dynasty period when the idealistic *Sarimpa*, a Confucian faction, came into power and the doctrine of Zhuxi and its ethnocentric world view became entrenched. In these dramas those who play the villains are not barbarous Japanese themselves, but compatriots who are considered traitors. These dramas represent the elimination of mixed elements and purgation of the nation.

On the other hand, *Legend* is the tale of a king of Goguryeo who fights against surrounding countries whose inhabitants are considered descendants of a mythical ancient kingdom. Therefore, this drama represents the assimilation of external elements and the enlargement of the nation.

These two perceptions from two sides are used to substantiate the 'nation'.